

2024－2025 年積雪期の八方尾根・武蔵山荘

～豪雪下の「赤い小屋」の記録～

亀岡岳志 (社会科／山岳部顧問)

kameoka.takeshi@musashi.ed.jp

要 旨

武蔵学園が長野県白馬村の八方尾根スキー場内に所有する武蔵山荘 (通称・赤い小屋) は、2024－2025 年の積雪が多量であったため、様々なトラブルや被害に見舞われた。この間の経緯を時系列に整理してまとめ、記録として残す。

1. はじめに

武蔵学園は、長野県北安曇郡白馬村の八方尾根スキー場内に山小屋を持っている。この山小屋「武蔵山荘」の外壁は赤く塗られているので、関係者は「赤い小屋」と呼んでいる。赤い小屋は、1950 年代当時の山岳部顧問であった大坪秀二氏が中心となり、地元白馬村の多くの方々の協力を得て、1959 年に黒菱平の北東方向 750m にある小さな平地 (標高 1450 m 付近) に完成した。現在は八方尾根スキー場スカイライン・コースの脇にあたる (図 1)。建設の経緯については、『赤い小屋－風雪の 20 年－』(1980) に詳しい。現在は武蔵学園が所有管理しているが、小屋建設の経緯等から利用の主体は武蔵高等学校中学校山岳部と山岳部 OB であり、山岳部顧問も運営に関わっている。スノーシーズンのスキーを中心に、夏の後立山連峰登山の起点などとして、宿泊・利用されている。

スキー場内にある赤い小屋をスノーシーズンに利用する際は、リフトに乗って入荘し、スキーで滑って退荘するのが、通常の形態である。しかし近年は降雪量が減っているため、小屋の利用に少なからぬ影響が出るが増えた。12 月末に行われる山岳部の冬合宿では、小屋の周りの雪が少ない年が多い。リフトが動いておらずスキー場内を歩いて入荘したこともある。また 3 月末の春合宿では、麓の雪が溶けてスキーコースが閉鎖され、ゴンドラに乗って下山する年もある。しかし 2024－2025 年のスノーシーズンは、五六豪雪以来とも言われる大雪となり、八方尾根スキー場の営業も含めて、赤い小屋は様々なトラブルに見舞われた。積雪状況の全体的な推移は写真 8 と写真 9 を参照されたい。

拙稿は、大雪への対応を考えつつ、赤い小屋を試行錯誤しながら利用した 2024 年 10 月－2025 年 6 月の記録である。基本的には、亀岡の直接の知見、亀岡に送られた報告書と私信 (写真含む)、現役山岳部員と山岳部 OB への亀岡の聞きとり、による内容である。

2. 2024 年 10 月－2025 年 6 月の赤い小屋とその周辺の記録

(1) 2024 年 10 月 21 日－22 日 秋の黒菱山寮協議会と赤い小屋施設点検

2024 年 10 月 21 日昼過ぎから黒菱ゲレンデ下にある石神井小屋で恒例の「黒菱山寮協議会」¹が開催された。武蔵学園の出席者は、施設課の樋口智志氏、山岳部顧問の中尾泰介氏と亀岡、そして山岳部 OB の平林壮太氏と西澤光太郎氏（ともに 91 期）の 5 名である。その前後で赤い小屋の施設点検と布団・毛布の入れ替えも行った。赤い小屋は、電線引き込みのための私設電柱がいささか傾いているものの、その他に大きな問題はなかった。

夜には、八方集落内の対岳館（石神井小屋地元管理人）で懇親会が行われた。来賓として（財）八方振興会²会長，八方尾根開発（株）³社長のお二方を招き，石神井高校，明治大学，武蔵学園の関係者および地元管理人が出席した。

(2) 12 月 21 日－26 日 山岳部冬合宿（現役部員 24 名，OB 数名，顧問 2 名）

スキー初級者が安全に赤い小屋へ入荘するためには，咲花北尾根とスカイラインという 2 本のリフトが運行していることが重要になる（図 1）。それ以外にもルートはあるのだが，急斜面を滑る必要があり，重い装備を背負った低学年の部員には難易度が高い。亀岡は合宿前日の 12 月 20 日に白馬入りし，赤い小屋とゲレンデの様子を確認した。ゲレンデはほぼフルオープンに近い状態であった。

合宿初日の 21 日は，OB のサポートもあり，メンバー全員で比較的容易に入荘できた。ただ合宿期間中は強風が続き，リフトが急に営業停止になることも多く，スキー練習中の現役部員が赤い小屋に戻れなくなって，麓の八方集落の宿に泊まるアクシデントがあった。それ以外は大きな問題はなく，合宿を終了した。

この時点では，小屋とその周辺の積雪量は例年よりやや多い程度であった。

(3) 2025 年 1 月 14 日 赤い小屋・視察（山岳部 OB 1 名）

山岳部 OB 武田真彦氏（50 期）による赤い小屋の視察が行われた。入口ドアの埋没などの情報を，顧問がメールで報告を受けた。

(4) 1 月 31 日－2 月 3 日 山岳部現役部員スキー（現役部員 7 名）

近年，現役山岳部員は中学入試の休みを利用し，赤い小屋に泊まってスキーを行っている。新部長の藤江修二君（101 期），そして前部長の平山遼君（100 期）を中心に，今年も 4 日間宿泊した。この時は，すでに記録的な大雪になっており，その状況下での利用であった。以下，藤江君の報告書（藤江 2025b）より亀岡が内容を抜粋・要約する。

＜1月31日の午前中は強風のため上部リフトが休止して入荘できず、ゴンドラ終点の兎平で待機。午後にスカイライン・リフトが動いて入荘。玄関ドアは埋まっていた、持参したスコップで除雪して小屋へ入る（写真1）。2月1日は灯油を荷上げ。2月3日に下山。屋根雪は落ちずにかなり増えていて心配。＞

かつて小屋入口ドア付近の雪は、風で飛ばされて長時間溜まることはほとんどなかった。しかし最近（この5年くらい）は厳冬期中心にドアが埋まったり、ドアノブの鍵穴が凍結して回らなかったりする頻度が高くなった。



写真1 埋まった玄関ドア (2/1)

（4）2月15日－18日 山岳部OB他スキー（山岳部OB 7名、ほか4名）

谷津朋郎氏（90期）、大泉和渡氏（84期）他山岳部OB 7名とその知人のガイド仲間4名が宿泊。以下、谷津氏から顧問に送られた報告書（谷津2025）と私信を亀岡が要約する。＜スコップを持参せず入荘に苦労した（写真2）。今後、厳冬期には携行必須である。屋根雪が一部ずり落ちて地面からの積雪とつながった。沈降する雪に引かれて風下東側の軒が一部破損していた。屋根雪と下の雪をスコップで切り離す⁴応急処置を行った。屋根雪の重みで扉や建具の開閉に支障が出た。灯油を80リットル購入、咲花グレンデ下からポリタンクで荷上げた。＞

利用期間中の断続的な吹雪により、積雪は増えた。またスキー場最上部のグラートリフトと黒菱第3ペアリフトは、大量の積雪で除雪が難しくなり、3月後半まで運休が続いた（写真3）。



写真2 ドアを開けられず、入荘に苦労する (2/15)



写真3 埋まって営業休止中の黒菱リフト
（丸山政博氏撮影、2月中旬）

谷津氏が作成した詳細な報告書（谷津2025）のおかげで、顧問から施設課樋口氏への連絡が迅速かつ的確に行えた。小屋の管理を委託している地元・金森建設への対処依頼も円滑に進行した。なお2月後半から3月上旬が、屋根上載雪の最大期であったと思われる。

（5）2月22日－24日 山岳部OB他スキー

（近藤雅幸氏（48期OB）＋日本山岳会メンバー数名。近藤氏からのメールを亀岡が要約。）

＜2月22日、小屋に着いて埋まった入口ドアを掘り出すが、鍵穴が凍結して開錠できず。中に入れないうまま麓に下山、車中泊。翌23日テルモスにお湯を入れ持参、ドアノブに湯を掛け、鍵穴を溶かして入荘。退荘時も施錠に苦労する。窓は雪に埋もれ外が見えず。＞

(6) 2月25日 武蔵学園施設課より白馬・金森建設への赤い小屋点検と除雪依頼

1月下旬以降の大雪下の赤い小屋の状況は、顧問から武蔵学園施設課の樋口氏へ継続的に連絡してきた。2月25日に樋口氏より金森建設へ現地視察および除雪の依頼がなされた。

(7) 3月6日－9日 山岳部現役部員スキー（現役部員7名）

恒例の特別授業期間の山岳現役部員による利用。想定される注意点については、事前に顧問と参加者で確認をした。現役部員のみによる除雪は危険があるため、行わないように顧問から伝えた。以下、藤江君からの報告書（藤江 2025b）を亀岡が要約する。

＜軒が破損した東側を中心に屋根がゆがむ。小屋内では梁がたわみ、壁や天井の化粧ベニヤ板が剥がれかけている。扉や窓ガラスの開閉に支障あり。私設電柱の傾きと上部の折れ曲がりが多いが、通電に問題はない。水は出るが、ガスは出ない。ガスメーターに記載の業者に連絡し、滞在中にメーターごと交換してもらった結果、利用可能になった。＞

(8) 3月10日－11日 山岳部OBの赤い小屋視察（山岳部OB 1名）、対応の相談

1月に続いて武田氏（50期）が赤い小屋を視察。顧問他に＜小屋内部の梁のたわみなどから見て、小屋が危険な状態にある＞由のメールと写真が送られた（写真4）。写真から、2月中旬以降に雪庇状に張り出していた屋根雪の一部が、自然落下したことも分かった。

3月11日、亀岡が八方のあたらしや旅館主人・丸山政博氏（地元管理人）へ電話をし、今後の対応について相談する。



写真 4-1 屋根雪の一部が落下している。(3/10)



写真 4-2 梁がたわんでいる。(3/10)。

(9) 3月12日 金森建設による除雪

施設課樋口氏から依頼を受けた金森建設が、八方尾根スキースクールのメンバーにも協力を仰ぎ、屋根の除雪を実施した。通常の積雪では、赤い小屋の屋根に登っての除雪は、地面と離れているため難しい。しかし現地視察したあたらしや旅館の丸山氏によれば、今年は多量の積雪のおかげで、屋根に乗るのは容易である、とのことであった。

金森建設から施設課へ送られた 3 月 12 日の除雪写真を見ると（写真 5），屋根上での作業はスノーダンプとスコップで行われ，安全確保のために雪はある程度残している。雪を下ろしたので，地面の雪は屋根と変わらない高さになっているが，軒先の雪は切ってある。電柱の傾きはひどいが，ガイシは落下せず，電線は雪面に接してはいない。



写真 5-1 金森建設ほかの皆さんによる除雪 (3/12)



写真 5-2 屋根から下ろした雪で，下地の雪が高くなった。(3/12)



写真 5-3 東側の軒は切ってある。(3/12)



写真 5-4 西側の軒も同様。電線はまだ落下していない。(3/12)

(10) 3 月 13 日－17 日 赤い小屋利用の可否と安全性評価に関する議論

OB 武田氏と近藤氏から「業者等による点検修理の上で，小屋を利用した方が良いのではないか」という意見を，顧問がメールで受け取った。春合宿は 3 月 19 日開始予定のため，早急の判断が必要であった。多くの木造軸組構造の山小屋では，雪の加重がなくなれば屋根は「戻る」ので，亀岡は赤い小屋の構造材にひび割れ等がないならば，宿泊利用に問題はない，と考えていた。施設課の樋口氏もほぼ同意見であった。他の山岳部顧問からは，金森建設に評価してもらう必要がある，という意見が出された。これらを踏まえて，施設課の樋口氏から地元の金森建設に諸調査の打診が行われた。

金森建設は 15 日に現地視察を行った。そして「今後ふたたび多量の積雪がないかぎり，おそらく問題は無い」といったニュアンスの意見が，樋口氏に送られた。また 3 月 17 日には，八方尾根で 15cm の積雪があったと連絡を受けた。

(11) 3月20日－22日 山岳部春合宿（中退）（現役部員21名，OB3名，顧問2名）

上記（10）の状況を踏まえ，顧問と部長の藤江君が話し合い，亀岡が現地で赤い小屋の状態を確認した上で春合宿の実施の可否を行うことにし，合宿開始を20日から1日遅らせて21日に変更した。高校3年生の山下寛君（99期）と亀岡は，3月19日に白馬入りした。20日は2人で朝から入荘して小屋の検分を行い，問題なしと判断した。その後，翌日から開始の合宿に向けて除雪に従事した（写真6）。午前中には先発隊の上級生部員7人も合流して小屋回りの除雪に励んだ。この日は全員があたらしや旅館に泊まった。

3月21日，下級生を含む合宿本隊が白馬入りして合流。ゴンドラで兎平に上がり，次のアルペンクワッドリフトに約半分のメンバーが乗った時点で，強風のためにリフトが急遽運転終了となる。交渉するも乗車不可で，顧問を含む残り半分の部員は麓まで下山してあたらしや旅館にもう一晩泊まった。一方，赤い小屋には現役部員とOB1人が宿泊した。

3月22日も朝から強風でリフトが動かず，麓に残ったメンバーは赤い小屋に登れなかった。さらに入荘して宿泊した藤江君より，＜強風で電柱ポールが折れてガイシと電線が屋根に落下した＞という報告を受ける（写真7）。この時点で合宿の中止を決定。麓にいた亀岡は咲花北尾根クワッドリフト終点より，リフト係員の許可を受けてスカイライン・コースをハイクアップして赤い小屋に入荘，小屋宿泊メンバーと一緒に滑って下山した。電線落下に関しては，管轄の中部電力（パワーグリッド）に現地検分と修理の依頼連絡をした。



写真 6-1 屋根雪がずり落ちる。(3/20)



写真 6-2 入口は雪の壁に。(3/20)



写真 6-3 屋根には簡単に登れる。(3/20)



写真 6-4 塞口も掘り出しが必要。(3/20)



写真 7-1 電柱が更に傾いた。
結果、上部ポールが破断 (3/22)



写真 7-2 電柱上ポールが折れ，ガイシと電線が落下。

(12) 2025 年 4 月 12 日 山岳部顧問・赤い小屋視察

亀岡が個人で八方尾根を訪れ、赤い小屋を視察。屋根雪は完全に落ち、電柱は曲がったまま電線は応急処置がなされていた。3 月下旬以降の大きな破損は見当たらなかった。

(13) 2025 年 6 月 30 日 春の黒菱山寮会議（原恭介氏（施設課）、樋口智志氏（元施設課））

例年 5 月第 3 週に行われる春の山寮会議だが、今年は 1 ヶ月以上遅れての開催となった。赤い小屋へ通じる黒菱林道が積雪で損傷を受け不通となっていたためである。山岳部顧問は諸事情で出席できず、施設課の原氏（樋口氏の後任）と顧問役の樋口氏が出席した。

原氏は「武蔵山荘（長野県白馬村）点検」を作成し、顧問と OB 会長等に送付した。以下このレポートより、積雪による小屋への影響と修理の方向性に関する部分を引用する。

「雪害による屋根部のへこみとそれを支える梁に歪みが生じている状況。今すぐの倒壊の危険性は感じなかったが、梁の補強や外壁塗装には足場を要することから修繕工事完了までの間は利用者の安全確保が難しい為、山荘利用の一時停止が望ましいと判断する。」

レポートを受け、OB 会長の小川隆氏（49 期）から赤い小屋の工事完了までの使用中止が、7 月 4 日付けで OB 会員各位にメールで周知された。

3. おわりに

拙稿執筆の契機は、まず大雪という気象条件があったが、もう一つは辻川敦先生（尼崎市立歴史博物館前館長）の講演「尼崎市新型コロナウイルス感染症「記録と検証」プロジェクト」の聴講であった。感染症対策の最前線で作成された行政文書や対応に当たった職員からのヒアリングを、歴史的資料として残すことの重要性が淡々と語られる刺激的な講演で、大いに触発された。そしてスケールこそ小さくても、2024-25 年積雪期の赤い小屋のインシデントの経緯を記録として残すことに、同じような意味があると気付いた。今回、大量の積雪とその小屋への影響が進行する過程で、情報共有、初期対応、赤い小屋の運営協議会設置の必要など、諸課題が浮かび上がってきた。継続的な議論が必要であろう。

¹ 例年 10 月と 5 月に「黒菱山寮協議会」が開催される。この会議は、黒菱ゲレンデ下に山寮を持つ 3 つの学校（石神井高校、明治大学、武蔵学園）が現地（その年の当番校の小屋）に集まり、小屋の共通インフラ（主に水道）の確認と会計を行い、加えて全般的な情報交換を行う機会となっている。

² 八方振興会は、元は八方（旧細野村）財産区である。赤い小屋の土地は、八方振興会から借りている。

³ 八方尾根スキー場の経営母体は八方尾根開発株式会社と白馬観光開発株式会社の 2 社。八方尾根開発株式会社の歴史は、黒菱周辺のスキー場開発とリフト設置を行ってきた細野スキークラブから始まる。黒菱の各山寮は、現在でも八方尾根開発との関わりが深い。

⁴ 積雪地域で軒の破損を防ぐための応急処置としてしばしば行われる作業。

写真 8-1 2024/10/21 布団入れ替えの車両が見える。



写真 8-2 2024/12/21 冬合宿初日、例年より雪が多い。



写真 8-3 2024/12/24 冬合宿中に積雪が増える。



写真 8-4 2025/2/15 小屋右手の屋根雪は、下地の雪と接する。



写真 8-5 2025/3/20 春合宿時、屋根雪は除雪と自然落下で減少。



写真 8-6 2025/4/12 屋根雪は全て落下。



写真 9-1 2024/5/20 春の山家会議



写真 9-2 2024/12/21 冬合宿



写真 9-3 2024/12/25 冬合宿中の吹雪で積雪増加。



写真 9-4 2025/2/15 小屋に向かって右手の風下（東）側に雪庇。



写真 9-5 2025/3/20 春合宿初日。ドアなどの除雪中。



写真 9-6 2025/4/12 屋根雪は完全に落下。顕著な損傷なし。





図1 八方尾根スキー場マップと赤い小屋の位置

「八方尾根スキー場ゲレンデマップ」により作成

【参考文献】

編者未詳『赤い小屋 一風雪の20年一』1980. 武蔵高等学校中学校山岳部
市村太一「2024年度春合宿報告書」2025（私家版）

原恭介「武蔵山荘（長野県白馬村）点検 建・電・設 全般」2025.

武蔵学園施設部施設課（私家版）

藤江修二「赤い小屋使用報告 2025年1月31日～2月3日」2025a（私家版）

藤江修二「赤い小屋使用報告 2025年3月6日～3月9日」2025b（私家版）

谷津朋郎「2025年2月 武蔵山荘 利用報告」2025（私家版）

【謝辞】

地元管理人あたらしや旅館の丸山夫妻には先の冬大変お世話になりました。金森建設の鈴木様、迅速な赤い小屋の保守修理ありがとうございます。武蔵高中山岳部の新OB会長・小川隆様、2025年5月31日に数年ぶりのOB会を開催していただき、赤い小屋の課題の共有ができました。山岳部顧問を35年間務められ、昨年度末に退職された中尾泰介様、山岳部の諸事含めて本当にありがとうございました。長く武蔵山荘・赤い小屋の維持管理に尽力され、やはり昨年度末に退職された樋口智志様には、最大の敬意と表すとともに、深く御礼申し上げます。最後にこの小文を、前管理人の故田中武敏様に捧げます。